

## 効率化を考える

～毎日の「タスク」を効率よくこなすために～

◎神戸 歩<sup>1)</sup>岐阜大学医学部附属病院<sup>1)</sup>

私たち臨床検査技師（技師）は日々の臨床検査業務に加えて、品質管理業務やタスク・シフト/シエアへの取り組みが求められている。さらに、新型コロナウイルス感染症をはじめ突発的な出勤停止による人員不足から日常業務が困難になる状況も起こり得る。技師が担当するタスクは、日常業務に専念する技師もいれば、管理職としてマネジメント業務を兼任する技師もいる。また、技師会業務や学会発表、論文執筆といった学術活動を含めると多岐にわたる業務（マルチタスク）が日常化しているケースも考えられる。このようなマルチタスクを効率的に行うためには、臨床検査精度を維持しつつ、効果的な運用を実現する必要がある。

今回、私が勤務する岐阜大学医学部附属病院（当院）検査部全体の動きから、特に血液検査部門の運用状況を紹介したい。当院検査部は平均年齢が32歳であり、入職歴5年目までの若手が多い検査部である。総臨床検査件数は年々増加する一方、検査部職員の総数（定員33名：パート除く）に大きな変化はない。そのため、限られた人数で多様な業務を効率的に管理し、日常業務の質を高めるための取り組みを行っている。例えば、複数の部門で働ける人材育成や仕組み作り、各技師の負担を軽減しながら、全体のパフォーマンスを向上させるための施策を実施している。他には、早朝病棟採血支援や外来採血患者数を検査室内でモニタリングすることで、リアルタイムで状況を把握し、必要な対応を迅速に行える体制を整備している。また、血液・一般検査部門職員による土曜日勤務の血液培養陽性ボトル対応なども行っている。これらの取り組みにより、メンテナンス開始のタイミングを状況に合わせて判断しやすくなり、他部署からのフォローによる部門担当者の負担軽減や残業時間の短縮といった効果が得られている。学術活動においても、直近2年間で欧文10報、和文17報の成果を挙げており、国際学会でのポスター賞も2名が受賞している。

さらに、当院血液検査部門には限られた人数で日常業務を行うための設備が整備されている。例えば、検体搬送仕分けシステムであるST・ROBO-2016k（ST・ROBO）から多項目自動血球分析装置（XN-9100）への血算検体直接搬送ラインが整備されている。また、測定結果を用いたロジック解析による血算および凝固線溶検体の自動再検や検体並び替え装置（TS-10）による検査終了後検体の収納も導入している。これら設備により、ワークフローの効率化と省力化が大きく進んでいる。

今後、血液検査部門として必要なことは、ISO15189業務を可能な限り日常業務時間内に組み込むことだと考えている。また、部門内や血液内科等との標本検討会や技師間の目合せ、知識共有の場を積極的に設けることで、全体的にワンアップすることを目標としている。

これらの施策を通じて得られた成果や課題を共有し、今後さらに効率的に日々のタスクを行うためのPDCAを意識した効率化を目指していきたい。

本発表を通じて、他施設の臨床検査業務にも役立つ情報を提供し、共に業務効率化を進めていく一助となることを期待したい。